

## 【だんぶり池づくりの経緯】

弘前市では、平成11年度と12年度の2ヶ年をかけ、市民・事業者・行政の協働を柱とした「弘前市環境基本計画」(市町村合併により失効)を策定し、その中の重点施策である「自然環境の復元」を具体化するため、貴重なトンボ等が残っていた休耕田を対象に、ビオトープ(生物生息空間・トンボ池)づくりを始めました。その中で、HEP21の自然環境グループ(村田孝嗣グループリーダー)を中心とする市民・事業者は、トンボ池のデザインや実際の整備作業を担当し、行政は休耕田の購入手続きや、整備に必要な材料や道具類を準備するなど、お互いの得意な分野を役割分担し、協働して作業を進めることとしました。

平成14年5月には、休耕田のヤナギ抜き作業に取りかかり、平成15年10月には半分ほど整備が進んだため開所式を開催して、正式に「弘前だんぶり池」と呼ばれるようになりました。その後も整備を進め、平成16年9月にはほぼ全体が完成しています。現在は、補修作業や草刈作業等の維持管理を行うとともに、ホタル観察会など自然学習の場等として活用しています。

だんぶり池では、青森県のレッドデータブックで絶滅危惧種に指定された、ハラビロトンボやハッチョウトンボをはじめ、40種近いトンボが確認されたほか、ゲンジボタルやヘイケボタルなど多くの昆虫類、里山に自生する様々な植物、また、カエルやサンショウウオなどの両生類、メダカなども確認されており、多様な生物が生息する貴重な空間となっています。

また、だんぶり池周辺では、季節により様々な鳥類も飛来しており、鳴き声を競っているほか、ニホンカモシカ、サル、テン、ノウサギ、リス等も確認されています。さらに、だんぶり池の両側を流れる沢(赤沢・大畠沢)では、上流に民家等もないことからサワガニやカジカも確認されるなど、里山としての自然がたくさん残っています。